



小林 G 一也 (情報科学)

まちを歩き、まちを知る

1990年の開学以来29年間、機械システム工学科にて3次元形状処理に取り組みました。計算機(コンピュータ)を道具として使ってきたことから、2019年開設の看護学部で必修「情報科学演習」の担当として教養教育センターに移り、2026年3月に定年を迎えました。

教養ゼミでは1年生14名ほどのゼミ生とともに毎週のように「まち歩き」を行ないました。ゼミ生は所属学科もさまざまです。専門性を高めるのは大事だけど、専門と直結する「仕事」は人生の一部でしかなく、日々の「暮らし」において充実した人生を過ごすことが重要と語り、暮らしを支えるまちを知ろう、まちを歩こうと説明しました。年の差40歳の若者にどれほど響いたかは分かりませんが、高校とは違う雰囲気や講義・実習に揉まれる中、木曜午後のひとときに息抜きしてほしいとの思いも込めました。キャンパスの北側を流れる用水路沿いや太閤山近辺を歩きました。縄文海進の頃の射水平野、半世紀前まで行なわれた湿田の稲作、北國街道の宿場町として栄えた小杉旧町などを説明し、ときにはバスに乗って竹内源造記念館・射水市新湊博物館に足を延ばしたり、「射水周遊公共交通ツアー」も実施しました。

私は学外で「NPO法人RACDA高岡」という市民団体に所属しています。万葉線の存続問題をきっかけに「歩いて暮らせるまちづくり」を標榜し、実質十数名ですが、四半世紀ほど細々と活動を続けています。一家に一台のクルマ県において、万葉線やバス・鉄道の公共交通には重要な役割があります。移動サービスの提供だけでなく、乗り換えなど歩くことでの健康維持、まちなか滞在時間増での商業活性化、公共空間を体験することでの社会性向上など、多くの好影響があります。バス・鉄道の会社が赤字であっても、運営に公金を投入して利便性を高めて利用者を増やす方が社会全体としてお得である、という費用便益効果の考え方で、都市経営の世界的な潮流です。富山市のコンパクトシティ政策もその一つです。

ゼミ生と歩きつつ、そのような「社会のコスパ」について語ったり、「理系常識」問題を出して知的好奇心を揺さぶるよう心掛けました。光速度・地球の直径・太陽との距離など、知識だけでなく測定方法も話しました。理系なら知っていて当たり前と思い込んでいたことが、今やそうでもないのが残念です。歩きながら目にしたものを題材に、坂の斜度・用水路の流量・路上の鉄板の重量などの大雑把な量をつかむことが技術者には大切、とも説きました。

大学が地域とともにあることは重要ですが、本学が地元で十分融け込んでいるとは思えません。地元から愛される大学は、地域と関わりをもちたがる大学でもあるはず。そこで提案です。小杉旧町の空き家を大学で借り、「サテライトキャンパス」としては如何ですか？そこで教員が年に数回ほどゼミや講義を行えば、旧町を学生がぶらぶら歩くようになり、高齢化が進む町に少し活気が戻ります。小杉駅とキャンパスを結ぶ学バスを旧町経由にして交通を確保しましょう。きっと教職員にとっても良い刺激になると思います。You got this, everyone!



2025年4月24日 教養ゼミ 射水キャンパス北東「用水路の滝」にて